

民俗博物館だより

Vol. II No. 1

1975. 5 . 5



展示室入口

目 次

奈良県立民俗博物館とその環境(その2).....	1
{ 民家の移築について.....	1
{ 民俗公園の小動物.....	2
来館者の声(小学生の作文から).....	3
水田耕作の用具(収蔵資料の紹介).....	4
だけのぼり(奈良県の民俗行事).....	6
体験学習講座・民俗講座・おしらせ.....	7

民俗博物館とその環境 (民俗公園)

民家の移築について

1 はじめに

我々の祖先が日常生活において、長い年月をかけて創意工夫を凝らし造り上げた『すまい』それが民家である。民家は生活文化財として、また歴史的景観の要素として重要であり、民家を見ればその中で生活がわかり、その時代の社会的環境も窺える。民家は社寺建築のような豪華さや技術的な優秀さは見られない。しかし、素朴で地方色豊かな民家の美しさは独得なものがあり、心のひだに触れるようなデリケートさを持ち合わせている。また、民家は周りの環境及び人々の生活と共に生き続け、たとえ生活様式の変化に伴う多少の改造がなされても、それ自身痕跡となり、過去の生活様式を伝えてくれるのである。各地方の風土に適応し、自然環境に溶け込んだ民家の姿は、人々が日々の営みの中で積み重ねてきた創意工夫の結晶ともいえる。

このような風土にねざした貴重な文化遺産である民家が、あるいは維持管理の困難さから、あるいは生活様式の急激な変化に適応できず、建て替えられまた無住となり失なわれつつあるのが実状である。我々はこのような事情をふまえて、貴重な文化遺産を後世に伝え得るような保存の体制を直ちに整えなければならない。民家の保存にとって現地保存がいかに重要であるかは言うまでもない。しかし、現地保存は多分に困難が伴い、我々が知らぬ間に滅びゆく民家が数多く存在するため、民家に生命力を与え、かつ永久保存をするための方策を講じなければならない。最近、公的な機関が民家を買収した寄贈を受け、民家集落として一般に公開しつつ永久保存するという傾向によりやく向いつつあるが、わが奈良県では、野外博物館ともいふべき大和民俗公園の建設が進み、昭

和50年度より現地保存の困難な民家の移築復原が始められる。

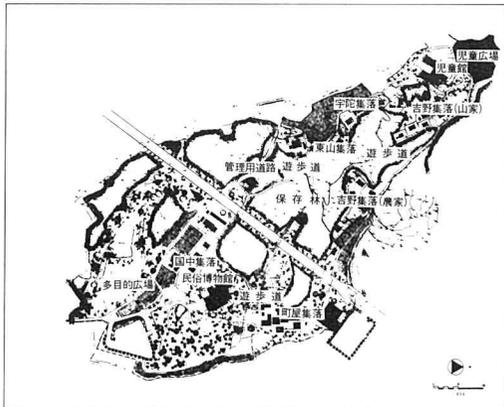
2 奈良県の民家の概要

現在、奈良県において国の重要文化財指定を受けている民家は17件、県指定文化財では10件あり、文化財の資格を有する未指定の民家の数は、かなりの量に上るものと思われる。県下で最も洗練された外観を有する民家は、大和棟と称される高塀造りで、17世紀末期から18世紀初期にかけて上層農民の家屋から発生したものと考えられる。大和棟は国中に集中しており、国中周辺の山間部にはあまり見られず、この地域では入母屋・切妻造りの民家が主になっている。また、吉野郡十津川地方のものは建ちが低く、屋根勾配のゆるい杉皮葺きの民家であり、国中及びその周辺山間部の民家とは全く異なるものである。町屋では奈良市、大和郡山市、橿原市今井町、五條市新町などに近世町屋遺構がきわめて多く残り、貴重な町並みを形成し、大型住居から小規模な町屋住居まで現存している。これらの農家及び町屋は、個々の主屋のみならずその屋敷構えも残っており、注目すべきことである。

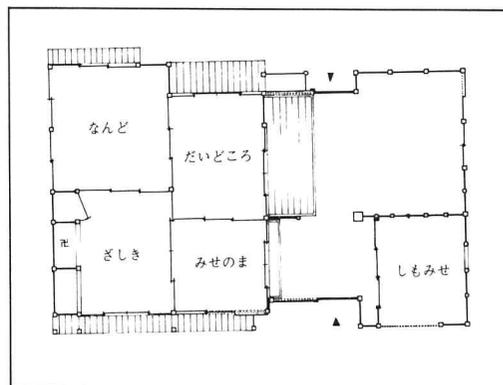
民家を平面的に考察すると、18世紀以後の一般農家の間取りの基本形は、通り抜け形式の土間と四間取りである。大型農家においては、17世紀中期には四間取りであり、17世紀末期には六間取りへと発展した。大型町屋では17世紀初期に六間取りが生まれており、六間取り平面は農家より町屋で先に発生したと見られる。なお、十津川地方の民家は、一般に梁間が小さく主要な部屋を横一列に並ぶ並列型の民家が多く、国中とは全く異なるものである。奈良県の民家、特に国中の民家は、外観的、平面的、構造的に見て先進性を示しているといえる。

3 民俗公園の民家移築復原計画

民家の移築復原に際しては特に自然環境に留意し、地



大和民俗公園基本計画図



旧吉川家住宅現状平面図

方色豊かな個々の民家のイメージを生かすような集落景観を形成する方針で計画を進めた。民家の配置は、町屋に始まり、公園の奥へ進むにつれて国中及び国中周辺山間部の農家となり、さらには吉野地方の山家というように、町から農村へ、農村から山村へと入園者を導き、興味つきない計画を立てた。また、民家内には民具を適所に展示し、それらの構成によって古い生活様式を無理なく理解できるように心掛けるつもりである。

今回移築復原する民家は、町屋に属する重要文化財の旧臼井家住宅と、国中の農家に属する旧吉川家住宅の2棟である。旧臼井家住宅は高取城の大手門下の街道に面した町屋である。臼井家は代々伊勢屋と称し、酒・醬油の販売を業とし、大年寄及び藩の公用伝馬の役を務めていた。屋敷構えは主屋・離れ座敷・内蔵・高蔵・米蔵・道具蔵などで一廓をなしているが、重要文化財に指定されている主屋及び内蔵が今回移築復原される。主屋は五間取りで、随所に突止め溝の差鴨居・帳台構えがあって、その建設年代は17世紀中期を降らないものと考えられる。主屋の屋根は大和棟であるが、これは後世の改造によるものと思われ、外観及び平面構造において農家の面影が強い町屋であり、他の市街地の町屋とはかなり趣を異にしている。内蔵の建設年代は明らかでないが、主屋に次いで建てられたようで、2階建てである。

旧吉川家住宅は、橿原市中町にあった農家で、当家は庄屋を務めていたと伝えられ、この地方の中級自作農の典型的な民家である。主屋の建設年代は18世紀初期と考えられ、喰違い四間取りで、この民家は三間取りから四間取りへの変遷を知る上での貴重な資料といえる。

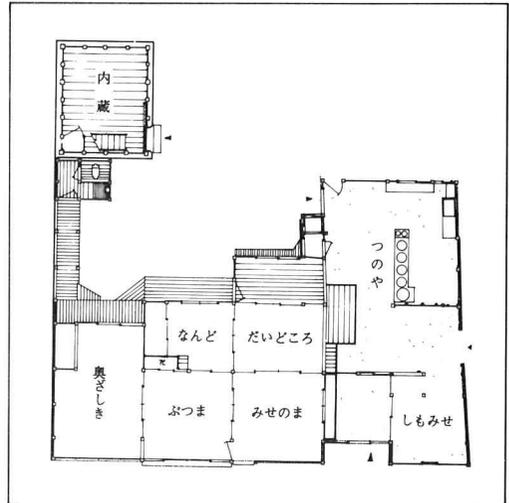
4 おわりに

我々はこの野外博物館を通して、民家の形態とそれぞれの風土との結びつきを、またどのような生活習俗が住まいに作用し、作用されているのかを学んでいただけたらと望むものである。
(今西良男記)

民俗公園の小動物

本公園の中心施設である民俗博物館の開館までに、修景工事として公園化した面積は約6ヘクタールであり、残り20ヘクタール近くは、自然林のまま博物館後方に広がっている。この自然林の林相は、アカマツを高木としたいわゆる里山といわれるもので、そこにすむ動物も里山に一般に見られるものである。

館正面に公園工事の際残されたこんもりとした一区画がある。その頂上にはお稲荷さんを祭った祠跡があり、戦前は狐が闊歩する地であったが、周辺が宅地化するにつれ、いづこかへ去って、今は残念ながら見られない。それにかわって、強敵が去ったとばかりにノウサギが我世を楽しんでいる。気をつけて観察すれば、公園のあち



旧臼井家住宅現状平面図



旧臼井家住宅

こちにノウサギの丸い糞が見られ、夜間、公園内を横行しているのがうかがわれる。先日などは、夜遊びがすぎたのか、朝、出勤時の我々と園路で鉢合せし、あわてて森へ逃げていったし、一度昼間に、事務室の窓から、植栽した灌木の間を走り去るのさえ見られた。ノウサギはふつう昼間は風通しのよい場所で寝ており、夜間に行動するものである。

森の中へ入ると、運がよければリスが見られる。リスの好むカシ、ナラの実（ドングリ）が沢山あるので餌には不自由しない。奈良公園ではリスの餌付けの試みがなされているが、なかなか思うようにいかないようである。猫などに狙われるのと、やはり人を怖れて近づかないのが原因と考えられている。欧米の公園では、人の手から餌をもらう風景が見られ、訪れた日本人を感心させているが、これも長年にわたり、人間は怖いものでない

とリスに納得させた結果そうなったのである。日本でもいつか成功するかもしれないが、要はやはり、リスを見つけて珍らしいからといって追いかけてたりしないことである。この公園にすむリスも大事にして、いつか人を怖れない時が来たならどんなに楽しいことだろうか……。

奈良盆地一帯が、昭和47年以来、銃猟禁止区域に指定されてから、野鳥も鉄砲に追いかけ回されずにすむようになった。特に狩猟鳥であったキジやコジュケイが安心したのか、時々公園附近を散歩している。他に野鳥では、公園予定地の小さなため池に、今冬ひっそりとカルガモ2羽が越冬していたし、大きなため池の岸の砂地部分には、北国で繁殖するイソシギがいつも見られた。博物館は自然林に隣接していることから、四季折々の野鳥が観

察できる。春から夏にかけては、この地で繁殖するウグイス、ホオジロ、コジュケイ、キジバトの囀りが、そして秋にはモズのたか鳴きが聞かれ、冬にはツグミ、ムクドリ、アオジなど様々な種類の鳥が見られる。

奈良盆地も年々宅地開発され、自然林が減少している。それ故、奈良盆地の中心地に近いこの地の自然は貴重なものである。今後、この自然林を公園として利用していくわけであるが、極力施設に必要な場所以外は自然林のまま残す方法をとることにより、動物たちも安心して生息でき、いつか公園を訪れた人の前にでてくる、そんな公園にしていきたいと考えている。

(川瀬 浩記)



チュウサギ



ホンドリス

来館者の声

小学生の作文から

上牧町立上牧小学校 三年(現四年) 堀口徳夫

社会見学はおもしろかった。アマゾンがけがをした時くすりを作るものとおなじものがあつたり、テレビがおおきくなったもので、そこのいすにすわって見たりしていました。ぼくは人力車にのりたかった。そして、むかしはかわってるなあと思いました。ぼくは、足ぶみだっこきや千ばこきは、ずかんや本でしか見たことがなかったの、本物を見た時はほんとうにうれしかった。

いろいろめずらしいものや、学校でならつたわるいこめといひこめをわけるきかひや、いろいろめずらしいものがあつた。ちよつとざんねんなことだけど、さわれなかつたのでとてもざんねんです。もしさわれたらなあと思いました。

はいる時も、ならのしまみたいなものがかけてありました。いちばんめずらしかつたのは、アマゾンがつかうヤゲンでした。あれはテレビのつくりだしたものだと思つたけど、見てからは、むかしにもほんとうにこんなものがあつたんだなあと思つた。

むかしのまくらもかわつていた。まえに四国へ行つた時、船の中でまくらをかしてくれました。そのまくらとおなじでした。おはぐるとゆうものがありました。口の中へいれると聞いたのでぼくはぞつとしました。もう一ついやだつたことは、ぼくたちはO先生がせつ明をしてくれていました。でも、ほかのくみは自由にあるきまわつてけんがくしていたので、ぼくもしたいなあと思つました。なぜかとゆうと、先生がせつ明するのはいいけれど、ぼくがいるとうしろからぼくのいるところをとつて、ぼくはうしろのほうにいたので、ぜんぜんきこえませんでした。いやだつた。だから、ほかのところを見ていました。でも足ぶみだっこきのところは、ぼくも見れました。

それから、たくさんひきだしのあつるところへきました。ぼくは、そこにおかしやミニカーをいれたいなあと思つました。あそこにはくすりをいれるそうです。ざいもくをはこぶときには、木を一どにいっぱいはこんで、木をいれてそこをすべるそうです。でも、さかのあつところは、上からおちてくるのでいのちがけのしごとと思つています。

(原文のまま)

水田耕作の用具

—— 収蔵資料の紹介 ——

(3)

耕作に使用する用具には、いろいろなクワ（鍬）やスキ（鋤）の他、畜力で操作するカラスキ（犁）やマンガ（馬耙）などがある。今回は、水田耕作の作業工程と対照して、収蔵資料の中からその用具の一部を紹介する。

1 田の荒起こし(アラタオコシ)に使う備中鍬

3月のはじめごろ、奈良盆地では稲の苗代ごしらえをする。昔は冬の田で裏作（ウラケ）として麦を作ったが、苗代にする田は麦を作らずあけておいた。

まず備中鍬でアラタを起こす。この鍬は別名サンボンアシともいい、鋭い三本の鍬先を土に打ち込んで前進しながら固くなった田の土を起こしていく。この作業をアラタオコシという。

2 土を細かくする(コナゲル)平鍬

備中鍬で起こした土を一面にコナゲルのヒラグワ（ホログワともいう）を使う。この作業をコナゲといい、3月中ごろにおこなった。

備中鍬の場合は、前進しながら土に打ち込んで使うが平鍬は、土を手前に引き寄せるようにして後退しながら使う。この鍬は鉄製の鍬先を木製の台（フロ）に取り付けてあり、標準名では風呂鍬といわれている。

3 スコップによく似た鋤

水田は、水が漏れないよう畦（田の縁）に泥を塗って固めてあるが（平鍬で塗る）、アラタオコシの時このアゼをとりはらう。これをアゼハナシという。この時まず鋤で田の縁に沿って切目を入れ、次に備中鍬で起こしていく。このほか、排水用の溝掘りなどにも用い、ちょうどスコップのような使い方をした。

4 ^{いもの} 鋳製の備中鍬（ナベビッチュウ）

5月はじめ、あらかじめコナゲておいた苗代に水路（ツ）から水を入れ、稲が発芽し易いようにナベビッチュウでカジテ（耕すこと）足で十分に練り田を平にする。ナベとはイモノ製のものをいい、鍋屋（鋳物師）が作ったものという意である。ちなみに、普通の鍬は鍛冶屋（野鍛冶）が打って作ったものである。

ナベグワ（イモジグワ）は、打って作った鍬（鍛冶鍬）に比べて脆く、石などに強く当たると折れ易い。しかし、鍬の両肩も土に切れ込むのでマンガカキ（水を入れた田をカジル）には都合が良く、田の土質に応じて鍋鍬と鍛冶鍬を使い分けたそうである。

最後にオーコで丹念に拘らし、さらに水を入れて水縄（チョナワ）を張って種を播く。またオーコではなく、^{えぶり}杵、^{しろか}或は代掻き棒という専用の用具を使用する事もある。

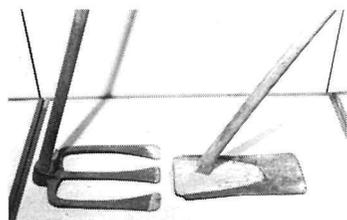
5 ドタオコシ（泥深い田での田ごしらえ）専用の鍬

ナワシロゴシラエの次は苗を植える田の準備作業である。この作業をタゴシラエといい盆地では6月中頃おこなった。作業の内容はナワシロゴシラエと同じであるが、ドタ（泥深い田）では専用のイモジグワを使った。

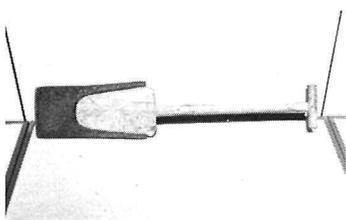
この鍬の先は鋳製で柄は竹であり、ドタの特性に最適であるという。また泥が直接体にかからないよう、腰にはスエミノ（藁の穂先だけで作った^{みの}蓑）を付けた。

6 畜力用の農具、犁（カラスキ）

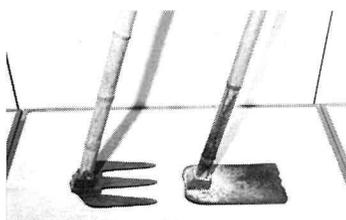
牛や馬の力で操作する農具には、カラスキ（犁）やマンガ（馬耙）があり、古代から使われたようである。中国大陸では、漢・唐時代の壁画の中にも画かれ、使い方



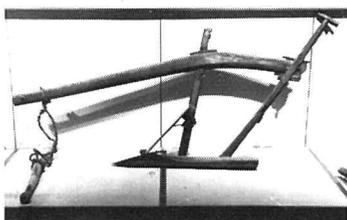
ビッチュウグワ(左) ヒラグワ(右)



スキ



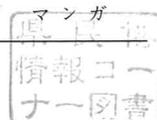
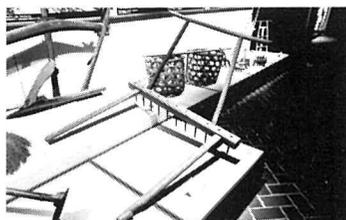
ナベビッチュウ(左) イモジグワ(右)



カラスキ



牛耕風景



や形も当館収蔵のものによく似ている。しかし、日本で普及しはじめたのは、近世になってからである。奈良県で牛耕が盛んに行われたのは畜産振興政策と相俟って昭和30年ごろまでで、それ以後は耕耘機が発達するにつれ急速に姿を消し、今では全く見られなくなってしまった。

カラスキは長床犁と無床犁とに大別される。長床犁は、大きな犁床（接地部）によって支えられ、安定性は良いが地面との摩擦が大きく深耕が出来ないし、また大形であるため小さい田では使いにくいという欠点がある。それに比べ、無床犁はやや小型で狭い田でも能率的に操作できたが、犁床がないため地面に対し一定の深度を保って耕すには多年の熟練を要した。耕耘機が出まわるまで最も普及したのはこの無床犁の系統であり、長床犁については当館にも数多く収集されてはいるが使用経験のある人は、概ね70～80才代であった。

7 馬耙（マンガ）

カラスキで耕した後田に水を入れ、牛にマンガを引かせて田を何度もかきまわす。田に起伏があったり、土のかたまりがあると田植えがやりにくし、稲の成長にも影響するので充分なめらかにしておく。

マンガには、太い鉄の釘が11本ついており、この部分で田の底を掻くのである。

8 人力用のマンガとカラスキ

牛耕用のマンガやカラスキの他に、人力用のものも若干ではあるが収集されている。

人力マンガは、小型の全木製で鉄の釘はなく、土壌のやわらかい田で用いたものと思われる。

人力用のカラスキは、江戸中期の農書『農具便利論』にも見える「源五兵衛米耙」と同型で畑作の用具である。当館の調査では70年前、棉を作る畑で使用したとなっている。これは「鋤」という名称で収集されており、一見

クワに似ているのでそういう名がついているかも知れないが、正確な名前かどうかは疑問である。使用法は、両手で取手を持ち、後退しながら耕していく。

人力用のマンガやカラスキは、まだ牛耕が普及しなかった時代に牛耕と同じ効果を得るための人々の工夫の跡であろう。

今回は水田の耕起用具を中心に収蔵資料を紹介したがその用具は、古代からあまり変化していない。弥生時代の遺跡として有名な静岡県登呂遺跡や奈良県の唐古遺跡からも、木製のクワ、スキの類が多く出土しており、外見は現在使用されているものとよく似ている。すでにこのころに水田耕作の基本は完成されていたのであった。その後種々の技術が発達して昔よりは安定した収穫が得られるが基本的には、千数百年の間、変化していないのである。人間のくらしとは毎年くりかえされる稲作のサイクル同様、外見はともかくとして本質的にはそう変化するものではないようである。

（大宮守人記）

※参考文献

- 堀井甚一郎著『奈良県地誌』 昭和37年
- 鏑方 貞亮著『農具の歴史』 昭和40年
- 大塚史学会編『新郷土史辞典』 昭和44年

※使用写真注

○牛耕風景・マンガカキ

昭和49年6月、王寺町王寺一丁目にて演出撮影。
相楽仙太郎氏協力による。

○シロカキボウ・アゼヌリ

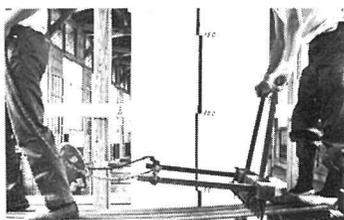
昭和49年5月、菟田野町平井にて撮影。
倉窪保雄氏協力による。

○ドタオコシ

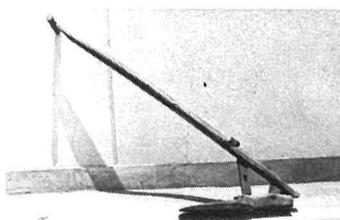
昭和49年6月、安堵村西安堵にて演出撮影。
荘司庄吉氏協力による。



牛耕風景(マンガカキ)



人力用マンガ



人力用カラスキ(畑作用)



シロカキボウ



アゼヌリ



ドタオコシ

だけのぼり

—— 奈良県の民俗行事 ——

(3)

春になりあちこちから花だよりが聞かれるようになると、農家では^{もみま}糶播きや田植えの準備にとりかからねばならない。大和では八十八夜（5月2日）前後に糶播きをする所が多かったが、そのころから農家にとってはあわただしい毎日が続くのである。

× × × ×

村々ではこのような農作業のあいまをぬって、節句や花まつりやオツキヨウカなどがあり、その日は休みであった。糶播きや田植えを前にしてこのような風習は、ほとんどの村で行なわれた。例を二・三あげれば、榛原町三宮寺ではこのころレンゾと言ってゴット（御馳走）や餅を作り、親戚を招いて終日休むというという風であった。また、明日香村稲淵^{こくま}では旧暦の3月10日に金毘羅さんをまつってある山上で御供撒きが行なわれた。各戸から昼飯を持ってゆき人々はそこで一日すごしたという。また4月11日、花見客でにぎわう吉野山では、蔵王権現の会式が行われるが、この日は大淀町今木（旧道はこの村の中を通り、吉野山や山上に通じている）でも権現さんの祭りがあり、村人の休日であった。この村の泉徳寺（真言宗）の境内の小高い権現堂に、寺の世話人やその年の当番となった^{まこ}撒子（今木では9垣内あり、各垣内1人づつ出てその年の米を集めたり、御供撒きをしたりする人）達が中心になり、ゴマ木を焚き、心経を読んで、石の蔵王権現をおまつりしたのである。金毘羅や権現をまつるといふ意味は定かではないが、この期のまつりは、その日一日を村人がこぞって休むという性格が強いようであった。

× × × ×

特定の山へ登って一日すごすということもある。都祁村の^{こうの}神野山や榛原町の鳥見山などがそれである。ツツジの花が咲く頃近在の村人が登り、山の上で一日をすごしたという。また、特定の山をダケと称してその山に登るといふ村もあった。二上山をダケサンと言い、二上山山麓の村々（「二上山が影になる村々」）の人が4月23日ダ

ケサンマイリと言って山頂に登って一日すごすというのである。また、ダケの登山口にある当麻山口神社ではオング祭があり、農作物の豊作を願う行事が行なわれた。二上山山麓から少し離れた村では山登りはしなかったが村内の二上山に近い池の土堤にゆき、そこで弁当を食べたという。また吉野町の竜門岳をダケと称して、同町の西谷・山口・柳の三ヶ村の人で当番の家の人が餅搗きをし、その餅を山頂の嶺明神まで持って参る。また、その年に生まれた男の子の家は、重箱に餅を入れ、酒一升をトックリに入れて「ヤマイロカ・オイマイロカ」といいあって登っていった。山頂では御供を撒き、酒を飲んだという。また、麓の山口神社では4月22日がオング祭であった。この祭に、杉葉とお札をもらい、糶播き（5月2日）の時カヤの箸（正月15日の小豆粥を食べた箸）と洗米、ツツジなどと共に水口に立てた。

大和にはダケと呼ばれる山があちこちにある。榛原町山路にある伊那佐山も、古老によると山路ダケと呼ばれていたという。各所にダケと呼ばれる山があったのであろう。なぜ春先にこのような山に登るのだろうか。村の人によると「田圃の水は竜門岳から流れてくる水を使うからだ」（吉野町西谷）などという。そのことから推して考えると二上山の場合も影になる村はちようど田の水をもらう範囲にはいるように思われる。またダケにまつわる伝承を眺めてみると雨乞いのために登るといふ例が大和の各地に見受けられる。

× × × ×

私達の先祖のくらしは農耕が中心であった。上記の習慣は、春先から田植えまでの厳しい農作業をひかえ、十分鋭気を養うために休むというように考えられるが、今日の休日とは違った感を与えるようだ。しかし、それはまた意味のあることであって、たとえばダケノボリなどの行事は田に水の恵みをもたらし、豊作たらんことを祈る意味があったようだ。昔の人々は神をまつりつつ、休日をすごしたのであった。（浦西 勉記）



権現まつりの御供まき(大淀町今木)



遊山(西国名所図会)

体験学習講座と民俗講座

★体験学習講座

前号で紹介した「しゃくしつくり」の後、2月23日には「ぞうりつくり」、3月9日は「麻糸つくり」、3月23日は「むしろ織り」を行いました。相変わらず好評を博しております。「麻糸つくり」や「むしろ織り」は、参加者全員がやるという事が出来得ないため、その工程を見学するという事に重点を置いて、講師の人からその仕事にまつわる昔の話などを聞きながら、その用具と仕事とのつながり、生活を理解していただくというねらいをもって行いました。

特に「麻糸つくり」の場合は、麻布を織る工程の一つであり、ハタオリについて知っていないと理解しにくいので、先に収録した「麻織り」の工程を、8ミリ映画とスライドの両方を使って解説を行ってから、講師の方に実演をお願いしました。全体としては大変難しいものになりましたが、大人の参加者には興味を示された方も多く、種々の質問を受けました。

★民俗講座

第3回民俗講座は3月2日「家の神について」と題して、京都女子大学の高取正男氏に講演をお願い致しました。カマド、井戸、^{かみや}廁にまつわる名もない土間の神々は、座敷に祀られているれっきとした名のある神々と異

なり、大昔私達の祖先が、土間一間の住居で暮らしていた頃から生活を伴って来た神で、後者の外部から迎え入れた神は、本来村はずれ(境)で祀られていたものを家に迎え入れ祀るようになったのではないかと、といった内容のお話をされました。第4回民俗講座は、4月13日大阪市立博物館長平山敏治郎氏に「人の一生～妻間い・嫁入り・そして～」と題する婚姻習俗の変遷を中心とした講演をお願い致しました。妻間い婚から嫁入り婚への過渡的習俗としての岩手の^い年季鞆、能登の^い日をとる嫁の話、そして現代の婚姻形態の錯綜した様相など、ユーモアを混じえたお話をお伺いしました。



麻糸つくり



むしろ織り

●寄贈民俗資料分類目録追加分(昭和49年度)

下記の資料をご寄贈いただきました。御芳名を追記致します。

調査番号	民俗資料名	数量	採集地	寄贈者名	備考
0-G					
505	双眼鏡	1	桜井市下	萩原清治郎	※
506	礼装用剣帯 装具(軍用)	4	〃	〃	※
683	旗	1	〃	〃	※
684	水筒	1	〃	〃	※

●利用案内

観覧時間 午前9時～午後5時まで
但し入館は午後4時30分まで

休館日 毎週月曜日(その日が祝祭日の場合は翌日)と年末年始

観覧料 大人100円・学生70円・小人50円
20名以上団体割引

交通機関 近鉄郡山駅より奈良交通バスの矢田山町、泉原町、矢田寺前ゆきにて「矢田東山」下車。国鉄関西本線郡山駅下車、バスセンターまで徒歩10分、奈良交通バスにて「矢田東山」下車。

★★★★ おしらせ ★★★★★

民俗博物館の行事予定

4月27日 体験学習〈竹馬・竹トンボつくり〉
5月25日 体験学習〈お手玉つくり〉
6月8日 民俗講座〈大和の道しるべ〉
6月22日 体験学習〈桶つくり〉
7月27日 体験学習〈水テッポウ〉

※体験学習講座は、午前11時と午後2時の2回、それぞれ1時間あまり行います。

民俗講座は2階の講義室で午後2時より行います。

※都合により内容などを一部変更することがあります。

■編集後記■

青葉・若葉が和らかな陽射しに映えてまばゆいほどです。矢田山界隈は鮮やかな緑に覆われていますが、一方当博物館の活動はようやく土中に根を張り出し始めようとする所です。次号よりフィールドノートなる新しいページを設け、調査で得た資料や古老から伺ったお話等をビビッドな姿のままお伝えしようと考えております。

(尾瀬河骨記)